

氏名	もり た れい こ 森 田 玲 子	
学位の種類	博士（芸術）	
学位記番号	甲博制第 40 号	
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 23 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）	
学位論文題目	創作舞踊における身体の動きに関する研究	
作品テーマ	（舞踊創作） Excessive	
論文題目	創作舞踊における身体の動きに関する研究	
論文審査委員	主査 教授	浜 畑 賢 吉
	副査 教授	豊 原 正 智
	副査 准教授	堀 内 充

内容の要旨

本論は、申請者が創作者（振付家でありダンサー）としての立場に立ち、常に抱いてきた問題意識である身体の動きについて論を進めようとしたものである。

第 1 章 20 世紀の創作舞踊における身体性について —モダンダンスからコンテンポラリーダンスへ

第 1 節 モダンダンスにおける身体性

20 世紀初頭のイサドラ・ダンカンについて、「自由な身体の美をダンスの基本」とし、「音楽が心の中に生み出す感情を直接に表現」しようとした「感情の自己表現」であるとし、その基礎に「デルサルト・システム」を指摘する。さらに、マーサ・グレアムやドリス・ハンフリー、ドイツのマリー・ヴィグマン等を探り上げ、モダンダンスにおける身体についてまとめられる。

第 2 節 ポストモダンダンスの方法

ポストモダンダンスの先駆けをなしたマース・カニンガムの方法が取り上げられる。彼は、モダンイズムでは考えられない偶然性を導入した振付け「チャンス・オペレーション」やダンサーに解釈

の自由度を与える不確定性の要素を取り入れ、音楽や美術と必ずしも同調しない方法などによって、まさしく脱中心的ポストモダンダンスを実践している。

第3節 コンテンポラリーダンス

「モダニズム」に対するアンチテーゼとしての「ポスト」という近代主義批判は背後に退き、自由な身体表現としての「現代性」が前景化してくることが指摘され、「インプロビゼーション」という創作方法を生み出し、「ヴッパタール舞踊団」を率い、演劇へ越境し、独特の両者の融合を図ったピナ・バウシュ、社会性、批判性を備えた作品を発表し続けるサシャ・ヴァルツが取り上げられる。

第2章 創作舞踊における身体の諸相

ここでは申請者の創作への影響という観点から、コンテンポラリーダンスの代表的な作家が採り上げられ、具体的な作品の分析を通して特質が論証される。

第1節 バットシェバ舞踊団におけるオハッド・ナハリンの手法

彼の『OhadNaharin DECA DANCE』では、この作品の7つのパートを詳細に分析する。そこに見られる身体の記号的動作を指摘し、また、舞台と観客との境界線を取り除くことで両者の距離を縮め、一体化する演出の手法が指摘される。

第2節 サシャ・ヴァルツのコンテンポラリーダンス

ヴァルツの代表作の一つ『ケルパー』が採り上げられ、ダンサー1人1人の身体性は低く、どちらかといえば、演劇的要素が強い。しかし、身体に重点を置き表現する発想がユニーク且つ新鮮であり、おそらく彼女の舞踊作品の特徴ではないだろうかという。

第3節 金森穰の特質

『Noism 04 「black ice」』では、大部分が音楽のカウントに合わせて身体の動きを行っており、また、その音楽の強調的な音をキッカケに身体動作を為すことに加え、感情的な動きやマイム的動作、仕草などがほとんどなく身体性がとても強いとその特質が論じられるという。

第3章 身体の動きとその受容

第1節 身体の動きと観客 —スザンヌ・K・ランガーの舞踊論

申請者は、舞台芸術とは「作り手」と「受け手」が、同じ空間としての「場」、同時に「時間」を共有することが絶対的に必要であり、また重要な芸術であると主張する。ランガーは、身振りは舞踊の基本的な形式要素であり、身振りや身体運動等にエネルギーや力などが加わり、視覚的幻影（イリュージョン）というものを発生させている。そして、観客はこのイリュージョンを舞踊において観ているのであるという。そして、それは観客が創造的に見ると言う行為によって初めて立ち現れてくるものである。

第2節 受容の構造

観客は、舞踊の技術的なものと相貌を創造的に見ることによって、そこにある種の感動を伴い、芸術的価値が生まれるのであり、また表現する側からは観賞者の積極的視線を引き出すような身体と身体の動きが要求されるとする。

結語

これまでの議論を通して、申請者は、学位申請作品『Excessive：人間の欲望と傲慢さ ―その悲劇と破壊』というテーマ、あるいは問題意識が生じたのはある意味で必然的であったような気がするという。そして、現代のコンテンポラリーダンスの方法にある芸術空間と現実空間、あるいはダンサーと観客との相互浸透とはまた別な意味で、虚の力からもたらされるイリュージョンとしての根源的な感情に没入するための観客の見る力をいかにして作品の形式として構造化してゆくかが今後の課題であると結論づける。

審査結果の要旨

まず「身体」あるいは「ダンス」についての20世紀から今世紀にかけてのそれらの意識の変遷については、具体的なダンサーや振付家を取り上げ、よくまとめられている。また、創作者としての立場からの、現代の作家たちの作品分析もダンサーかつ振付家としての申請者らしい論述が行われており評価したい。

副査 堀内充 博士作品「Excessive」の審査報告

幕が上がると男が現れる。はじめはスウェット姿だったのが、服に着替えると長髪・サングラス・パンクを思わせる風貌となり、見るからにして反社会的に生きる男の姿がそこにはあった。一瞬、舞台奥でワンピース姿の美しい女性が現れると怒りがこみ上げたのか激しく拒絶するかのように暴れる。まさにアウトローである。

やがて、客席からまるで裸姿のような肌色のレオタード姿の男女4人が彼を応援するように腕を振りながら現れた。黒の男を挟むように後ろに再び白いワンピース姿のバレリーナが斜幕越しにいる。そこには白―黒―無色というような縮図を思わせ、作品の意図となる構図を感じさせる。そして今まで心地よい音楽が流れていたがいきなり遮断され、黒と白が対決するかのような空間が出来上がり観る側にも高揚感を与える。男は無色の男女を自分の思うままに動かし始める。こちらが想像していたものとは裏腹に流麗な動きが美しい曲線を描くような踊りが展開する。アウトローな姿と正反対のような心の優しさがそこにはあった。そして踊り終わると疾走して奥舞台に下がり、白の女性が交代するようにセンターに入り無色の男女に息を吹きかけるように整列させてふたりは消えた。

次の場面では4人がスクエアの中で自己を強調するようにひと舞いしてポーズを決める。ダイナミックであったり、優雅であったり、勇敢であったり、妖艶であったりといずれもユーモアに溢れていた。そして、そのまま4人は舞台中央に下がり、男同士になったり動物的になったり、さまざまなダンスが展開し静止する。そこへ久しぶりに先ほどの黒の男が再登場する。今度は皮肉まじりに4人にひとりずつ面白おかしく自分の思うままに衣服を与え、みんなを退場させる。4人目の男には思いっきり空中拳法の如く蹴飛ばすところが愉快で観る者にも笑いを誘った。

そして今度こそ黒と白の対決が始まる。いよいよふたりきりでそれぞれプレパレーションを思わせる個々の踊りのあとぶつかり合う。ただぶつかり合うというよりは組んで離れるといった様相だ。ただ残念ながらこの踊りはきつとみどころのひとつになるはずであろうに、ダンサーの動きがふたりとも鈍く感じてしまった。これは作品を構築したなかでちょっと稽古不足だったのかもしれない。

このように演じる側も観る側もダンスを体験する瞬間が随所に見られた。作品の最後には白を打倒すべく、破壊的な踊りを展開し、まるで環境破壊の如くゴミの山を毛散らかすように幹散らす。これによって白を滅亡させようとしているような激しさであった。そして、ラストは4人の男女も自らも多量のゴミが上から振り落とされ下敷きになるように倒れた。しかし、一番破壊したかった白はずっと美しくポーズをとったまま倒れずに二本足で立っていた。白の存在は神なのだろうか。破壊者は自身と共に破壊され野望が崩れた瞬間のようにも映った。

副査 豊原正智 論文・作品の審査報告

先ず第1章における考察は、決して網羅的ではないがモダンダンスからポストモダンダンス、さらにはコンテンポラリーダンスのそれぞれを代表するダンサーやコレオグラファーたちを適確に選択し、モダンダンスにおける身体の純粹化、脱中心的ポストモダンダンスの方法、あらゆる形式をもった現代社会への挑戦としてのコンテンポラリーダンスとして、内外の文献を駆使し、論じている点を評価したい。第2章で採り上げられている金森穰について、「シャープで無駄がない、洗礼された確かな技術を用いたダンスを見せる。また、とてもダイナミックで、他のダンサー達もそうであったが、重心が常にセンターラインになくても如何様な動きにも対応出来る安定した軸のある鍛え抜かれた身体を保持している」という指摘はダンサーとしてまた、振付家としての申請者の適確な分析であり、評価されるところである。第3章におけるランガーの舞踊論では、論述が浅い点もあるが、観客の側からの創造的に身体による「虚の力」を見ることという分析で、よくまとめられている。

一方で、いくつかの問題点も指摘しておきたい。第1章でのポストモダンダンスについての議論では、カニンガムに偏りすぎており、もう少し他のダンサーやコレオグラファーの議論が必要ではなかったかと思われる。また、第2章で採り上げられるナハリン、ヴァルツ、金森については、なぜ彼らか、という議論は必要であろう。第3章においてはもう少し議論を深める必要がある。特に「虚の力 (virtual power)」

や「感情 (feeling)」といったキーワードについてはもう少し掘り下げた議論が必要だろう。また形式的な点であるが、註に対する正確な記述を心がけてほしい。

この申請論文は、以上指摘したように問題点も残しているが、芸術制作専攻の学位（博士）論文として一定の水準に達していると認められる。このことは審査委員の一致した見解である。

作品に関しては、鏡、化粧品、椅子、ラジカセ、衣装、紙吹雪、叫び等、金森穰らのコンテンポラリーダンスの延長上にあるように思え、それでいて非常にオリジナルに富んだ作品であったと思う。申請者の激しい身体の動きのダイナミズムや叫びには強い生命力が感じられる。大変完成度の高い作品であった。

論文と博士作品のふたつをとおして今回の研究題目を緻密に迫っていることがしっかりと伺えた。論文は舞踊の歴史をたどり、未来に向かう方向性を探る姿勢をしっかりとみせた。どの芸術ジャンルでも感性だけに頼るのではなく、知性を豊かにして創造することが求められる。今回の上演審査でもっとも興味深かったのは、作品は常に意外性に包まれ観客を飽きさせず、論文題目である新しい舞踊の追求が、既存のものを破壊させて自己を造りあげるスタイルであったことである。作品の最後では結果的に破壊しきれずに終わるのだが、これは口頭試問で申請者が話していたことだが、神を破壊することはできないという意図らしい。これはまさに温故知新であり、観ていてもとても頼もしく感じたのは言うまでもない。よって学位・博士論文を合格としたい。